

胆沢劇場参加者の声を拾うと、次のような言葉が聞かれます。

「自分の可能性を試すところ」「仲間づくしのもの」「日常生活にないものがある」「友達ができる出会いの場」「互いに支え合う場所」「仕事にはない感激がある」「交流をおとした人づくりの場」「ほんとうの自分を取り戻す時間」「出来上がりのよりも、その過程が楽しい」。

よく胆沢劇場は「人づくりの場」とい

われます。公募で集まった年代の異なる人たちが、心を一つにして作品を作り上げていき、その過程でそれぞれが刺激し合うことで、人間として成長していくということなのでしょう。

過去に、町外から胆沢劇場に出演を希望する子役がいました。その子は登校拒否の子でしたが、新聞記事を見て「やってみよう」と思い、母親から連絡がありました。参加者は胆沢町民に限定をしていましたが、「そういうことなら」と喜んで受け入れました。

胆沢劇場での日々の練習や出演、客席からの拍手で、自分が評価されることを学び、自信がついたのでしょう。劇場が終わって次の学期から登校できるようになり、登校拒否を克服できたという心温まるストーリーもあります。

市民劇場はプロではありません。技術を超えて、素人が精一杯取り組んだ結果そのものです。胆沢劇場は、世代の違う人と人が一緒にあってものをつくりあげるといふ、学校教育では体験できないことを学べる場でもあるようです。

何度も繰り返される胸上げで、参加者同士をたえ合っ、公演当日の打ち上げ



「つくり上げる大切さと喜びを学んだ」

伊藤 豊さん (27) =胆沢区小山字北長檀=

一番初めに見たのは第7回公演。子ども心に「綺麗な舞台だなあ」と感じたことを覚えています。第9回で、同級生や先輩が大活躍をしたのを見て「出てみたい」と思い、第10回の時に初めて参加しました。第11回と高校3年生の時の第17回に参加。仙台の専門学校進学を経て、21回目から継続して出演し、今回で9回目の出演になります。

ことしの公演では、学徒の守役で出演し、キャストをまとめるキャストリーダーを務めました。

毎回の公演すべてが思い出深いですが、強いていえば、初めて主役を担当した22回と、「役」がすごく楽しかった25回が特に印象に残っています。初めて主役を演じた時は、新しく覚えることが多くて、すごく大変でした。なんとか本番にこぎつけましたが、公演を終えた後

の見送りで「良かったよ」って言われたことがすごくうれしかったです。

胆沢劇場で学んだことは、一つのことを、大勢でつくり上げる大切さと喜びです。普通に暮らしては、なかなか経験できることではないですから。これまでの参加を通じて、「人とかかわり」や「つながり」といったものの大切さも感じることができました。年下や年上など、世代を越えた人と楽しく語り合えるという、「人」との出会いが、得たもので一番大きいです。

中高生や若い年代の人が参加して「楽しかったから続けたい」と思っていることを、より多くの人に感じてほしいです。練習などでつらく苦しい思いをするかもしれませんが、本番が終わった後の感動を、ぜひ味わってほしいですね。

the Voice

「やり遂げることの大切さを学んだ」

渡邊 郁美さん (20) =胆沢区小山字下中谷地=

胆沢劇場への参加は今回で10回目です。初めは小学2年生の時の14回公演です。以後、6年生まで子役などで続けて参加しました。部活動の関係で、中学校3年間は休みましたが、高校1年生から現在までキャストを中心に参加しています。

自分は人前で演技することが好きで仕方ないんです。ステージの上で、お客さんが笑ったり泣いたりする反応を感じ取れるのが特にうれしいですね。自分の演技でそういう感動を与えられるということは幸せなことだと思います。

毎回見送りの時は感動していますが、ことしは特に涙が止まりませんでした。はじめて、キャストリーダーとダンスリーダーという大役を任せられ、すごく大変でしたので。苦労の分、達成感があったのでしょ

うね。これまでの参加を通じて、胆沢劇場からは、苦労しながらもやり遂げる大切さ、「達成感」を学びましたね。

胆沢劇場は一つのことを、いろいろな年代の人が集まって作り上げる、まさに「協力」です。みんなが同じ気持ちになって取り組むことは、すごく良いことだと思います。

また、胆沢劇場に参加し、いろいろな年代の人と接しているうちに、大人との付き合い方、子どもとの付き合い方など、年代に合わせた「人」との接し方を学びました。同じ年代の友達からは、違う年代の人と付き合うことを珍しがられます。

「胆沢劇場の良さ」や「一人一人がひとつのことに頑張っている。そういう人たちがいるということ」をより多くの人に知ってもらいたいと思います。

26年間継続出演一。どんな役もこなす名物役者

石川 慎一さん (50) =胆沢区南都田字銭倉=



第1回から今回の26回までずっと役者で参加しています。第8、10、

22回公演のときは演出も経験しました。「見に来たお客さんに良いものを見せて、感動してもらいたい」。この気持ちは初舞台のころから同じです。役者の魅力は普段の自分と違う自分になれること。地元の人々の反応が面白いから、毎回楽しんでやっています。

いろいろな人との出会いが自分の財産です。劇場が縁で、参加者同士が結婚した時は、仲人を務めたこともありました。

役者が「悔しい」と思うまで、厳しく厳しく注文をつけ、その後少しずつ褒めていくことで、自信につなげさせる。最後までやりきったあとは、胸上げなどで涙を流しながら労をねぎらう。胆沢劇場の裏には、そういったもう一つの胆沢劇場といわれるストーリーがあります。

わたしは毎年、今回が最後だと思って参加しています。26回出演していますが、常に成長の気持ちで、常に教えられています。のちのち町民劇場博物館的なものができたら、館長になって生き証人として胆沢劇場を語り継いでいきたいですね

胆沢劇場は、誰でも参加でき、いろいろな年代が一つになって取り組む文化活動です。50歳より上の年配の方にも、どんどん参加してもらいたいと思います。